

# みかん農園

大阪大学大学院工学研究科  
機械工学専攻 教授

中山喜萬

大阪からここへは月に1、2回通い、もう4年目になる。やっと到着して車のドアを開けると、フワッと甘い香りが飛び込んでくる。ウーンさわやか。5月の生口島はみかんの白い花で包まれている。ここは、みかんや八朔、レモンなどの柑橘栽培がとても盛んなところだ。街路樹に橙が使われているほどであり、シトラスパークという柑橘公園もある。

一般には、平山郁男画伯の出身地で平山郁男美術館や国宝の三重の塔がある向上寺、西の日光といわれる耕山寺で知られている。自転車好きの人なら、春と秋に開催されるしまなみ海道自転車レースのコースになっている島であることをご存じだろう。退職後に海に見える場所に住みたいという思いで選んだところだ。

こんなことから柑橘の世話をするようになった。年間の仕事量もまったく知らないままに見よう見まねで始めた。時たまの週末作業なので十分な世話ができていない。草の成長の早さには驚かされる。3週間も間を空けるともうたいへん。その草を刈り、肥料をやりとなんとか最低限の世話だけはしている。柑橘の木には申し訳ない気持ちでいっぱいである。なので、白い花が咲き出すと、「よく頑張ってくれたね」、「実をつけてね」と、ねぎらいと期待の言葉をかけてしまう。

夏になると、育ちの悪い実を優先して摘果する。実の数を減らす作業である。それぞれにあった育て方を施すのではなく、大きい実をより大きく育てるということだ。教育と大きな違い。ずいぶん思い切らないとできない。一つの枝先が二つに分かれそれぞれに実をつけている。どちらを残そうか？ 一つの枝にたくさん実をつけている。どれを残そうか？ 切り落とす度に「ゴメン」と言っている自分がある。

秋から冬になると葉の緑を背景に実のオレンジ色が映える。島が、山が美しく輝いて見える。「よく頑張ったね」と木々に感謝するときである。12月初旬のみかんから始まり、ネーブル、デコポン、はるか、八朔、安政柑と、次の年の3月まで味を見ながら順番に収穫する。酸味の強いものは甘く食べられるまで1ヶ月か

ら2ヶ月ほど倉庫で寝かせることになる。お店に並んでいる柑橘のように肌はきれいではないが、味はいけると思っている。知り合いの皆様にも食べてもらって、「甘いね」、「味が濃いね」と言ってもらうことが一番の喜びである。

ところで、日本の柑橘の生産推移はどのようになっているのでしょうか？ 図1は全国温州みかんの栽培面積と生産量の推移（資料1）である。1970年を越えた頃に生産効率が向上しているが、それから直ぐに栽培面積が減少し始め、それに伴って生産量も減少の一途をたどっている。図にはないが2008年には生産量は100万トンに至り、その後横ばい（資料2）のようであるが、明らかに柑橘農家の数の急激な減少が見取れる。柑橘の育成は日当たりの良い場所が適している。つまり、太陽光発電に適する場所ということになる。最近、生口島でも広大な面積が太陽光パネルで敷き詰められて発電所になった。今後は、このような再生エネルギー産業の参入も柑橘農家の減少に追い打ちをかける要因になるのかも知れない。レモンを除いて他の柑橘の輸入はこれまでは少なかったが、これから先は増加の可能性もあるように思える。すこし心配なところである。

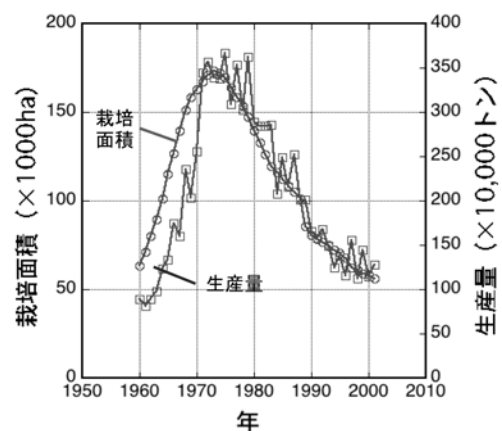


図1 温州みかんの栽培面積と生産量の推移

資料1：<http://www.mikan.gr.jp/stat/kakaku.html>

資料2：<http://nocs.myvnc.com/study/geo/tangerine.html>

(学 界)